

保幼小接続に関する研修・交流の実態及び保育者の意識

The actual situation of training, communicative exchange
and nursery awareness related to the collaboration
between the staff of nursery schools, kindergartens and elementary schools.

伊藤 哲章* 沼田 春香* 宗像 佑華* 柴田 卓*
Tetsuaki Ito Haruka Numata Yuka Munakata Suguru Shibata

The purpose of this study was to clarify the attendance of nursery school staff workshops related between nursery schools, kindergartens and elementary schools, and to consider how nursery school students are currently thinking. Therefore, a questionnaire survey on the collaboration of nursery schools, kindergartens, and elementary schools was conducted for nurseries. As a result, the following became clear.

(1) There are differences in all facilities, yet no difference in participation in workshops related to the staff of nursery schools, kindergartens and elementary schools.

(2) There are many kindergartens, but few kindergarten exchanges between preschools staff and kindergarten staff.

(3) We found no difference in the way of thinking of the nursery school staff regarding the connection between the nursery school, kindergarten and elementary school due to the difference or quality of facilities.

(4) Nursery school teachers, kindergartens and elementary schools associated with the workshops benefit the most from this exchange. I strongly consider the necessity of curriculum through mutual exchange.

(5) Regarding the age group of childcare workers, childcare workers in their fifties are most eager to talk to young children who will soon be entering elementary school.

I はじめに

我が国の国立教育政策研究所は、2016年4月に幼児教育研究センターを設置した。この背景には、海外における幼児教育研究に対する関心の高まりや、国内の幼児教育政策、特に無償化に関する議論が進展する中で、幼児教育の重要性やその質に関してエビデンスに基づく政策立案の必要性が高まったことなどが挙げられる。更に、幼児教育研究センターは2017年3月に「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」を報告している¹⁾。この報告書で

* 幼児教育学科

は、幼小接続期を対象に、国内外の先行研究のレビューや幼小接続期カリキュラムの実態の分析、育ち・学びを支える力を捉える手法を検討した結果をまとめている。とりわけ、国内における幼小接続研究の特徴や課題として以下の4点をあげている。①最初は「小1プロブレム対策」が中心であったが、次第に「教育の接続」に重点が置かれるようになった。②取組は幼児と児童の個々の交流が中心で組織的ではなく、幼小接続の成果を十分に見出した研究はまだなかった。③接続期カリキュラムは自治体や園・学校で作成されているが、目的や取組、接続期の捉え方はそれぞれ異なり、カリキュラムに影響していた。しかし、幼小が同時に作成することは相互理解を深める可能性があった。④幼児教育実践の中に小学校教育につながる芽生えを見付け、それを強化することで幼児教育の成果を小学校教育につなげる実践も模索されていた。そして、同報告書では、今後の幼小接続に関する研究に、幼小双方の立場からの検討や、家庭や地域、他施設など子供を取り巻く環境も含めた幼小接続の在り方、更に保育者養成段階から接続に対する理解と意識を高める方法など、理論と実践をつなぐ必要性を求めている。

また、国内では保幼小接続に関する書籍も多数出版されており、保幼小接続における課題を取り上げたものとして全国幼児教育研究協会(2006)²⁾、小玉(2017)³⁾などがあり、保幼小接続におけるカリキュラムや実践例を取り上げたものとして、秋田(2002)⁴⁾、無藤他(2009)⁵⁾、木下(2010)⁶⁾、酒井・横井(2011)⁷⁾、善野・前田(2012)⁸⁾、秋田・第一日野グループ(2013)⁹⁾、高櫻(2019)¹⁰⁾などがある。一方、国立情報学研究所のCiNiiを用いて2015年から2019年の5年間で「保幼小接続」及び「保幼小連携」というキーワードで検索したところ(本文ありで)、「保幼小接続」が13件、「保幼小連携」が49件の論文が該当した。これらの論文の中で、保幼小接続に関して保育者の意識を調査しているものは少なく、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園(2015)¹¹⁾、白神他(2017)¹²⁾、古橋他(2018)¹³⁾、鈴木(2018)¹⁴⁾などの研究が見られるのみであった。しかしながら、これらの研究の中で、保幼小接続に関する研究会の参加の有無と交流の有無が保育者の保幼小接続の考えに与える影響や、保幼小接続の考え方の施設による違い(幼稚園・保育所・こども園)などに着目した研究は見当たらなかった。そこで本研究では、小学校との接続に関する研修会の参加の有無と小学校との交流の有無が保育者の保幼小接続の考えに与える影響及び、保幼小接続に関する保育者の意識を明らかとすることにした。

II 研究方法

2019年8月にK短期大学で実施された講習会に参加した保育者116名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙調査は、保幼小連携に関する内容が中心である(資料参照)。なお、質問1、質問2は2件法(2:ある, 1:なし)を用いて、保幼小接続の研修会の参加及び小学校との交流の有無を確認した。続いて、4件法(4:とてもそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わ

ない、1：全くそう思わない)を用いて、保幼小接続に関する5つの質問を行った。質問内容は、保幼小接続の研修会の必要性(質問3)、保幼小接続のカリキュラムの必要性(質問4)、小学校入学後を意識した声掛け(質問5)、小学校教諭と保・幼の先生の交流の必要性(質問6)、小学校1年生と年長児の交流の必要性(質問7)である。また、これらの選択式調査に加えて、質問2では施設での具体的な保幼小の交流、質問5では小学校入学を意識した具体的な声掛け、質問6では保幼小の交流が必要な理由、質問7では小学1年生と年長児に必要な具体的な交流についての4つの記述式調査も行った。次に、質問紙調査の集計後、グループに分けて統計的な分析を行った。グループ化は、第一に保育者の施設別で、幼稚園(21名)、保育所・保育園(47名)、こども園(48名)、第二に保幼小連携の研修会及び交流の有無別で、研修・交流ともにあり(28名)、研修のみあり(19名)、交流のみあり(46名)、研修・交流ともになし(23名)、第三に年代別で、20代(20名)、30代(70名)、40代(19名)、50代(7名)、以上の三つで行った。また、統計分析ソフトは、SPSS Statistics26を使用した。

Ⅲ 結果・考察

1 選択式の質問紙調査

① 施設別による保幼小接続の状況

まず、質問1では、施設別に保幼小接続に関する研修会の参加有無を調査した。結果は、表1の通りであった。保育者全体では参加有が47名で約40%であった。カイ二乗検定の結果、施設の違いで研修会の参加状況に統計的な有意差は見られなかった。この背景には、県内の各自治体において教育委員会主催の保幼小連携の研修会が開催されていることがあげられる。例えば、郡山市教育委員会では平成26年度に「郡山市版スタートカリキュラム—幼保と小の円滑な接続に向けたスタート・アプローチカリキュラム—」¹⁵⁾を策定し、市内全域の小学校、幼稚園、認定こども園、保育所(園)を対象に研修を行っている。

表1 施設別の保幼小接続に関する研修会の参加有無(n=116人)

施設	参加有	参加無	合計
幼稚園	12	9	21
保育所(園)	18	29	47
こども園	17	31	48
合計	47	69	116

$$\chi^2(2) = 3.023 \quad \text{n.s.}$$

続いて質問2では、保育者のそれぞれの施設での小学校との交流の有無を調査した。結果は、表2の通りであった。カイ二乗検定の結果、統計的な有意差が見られ、幼稚園教諭は小学校と交流している場合が統計的に有意に多く、保育士は統計的に有意に少なかった。保育所(園)は、対象年齢が0歳～5歳であり、例えば0～1歳児を受け持っている保育士が小学校の園児と交流する機会は少ないため、当然の結果といえよう。また、今回参加したこども園の保育教諭は、幼稚園から移行したこども園が多いため小学校の園児との交流が多い可能性もある。

表2 施設別の小学校との交流の有無(n=116人)

施設	交流有	交流無	合計
幼稚園	18 [▲]	3 [▽]	21
保育所(園)	21 [▽]	26 [▲]	47
こども園	36	12	48
合計	75	41	116

$\chi^2(2) = 14.529$ $p < .01$ (▲: 有意に多い, ▽: 有意に少ない)

次に、質問3～質問7で、保幼小接続に関する考え方に、施設によって違いが見られるか一要因による分散分析を行った。結果は、表3の通りであり、いずれの質問でも施設の違いで統計的な有意差は見られなかった。ただし、全ての質問で幼稚園に勤務している保育者の回答が最も平均が高く、幼小接続を意識している保育者が保育所(園)・こども園よりも多いといえる(図1参照)。

表3 施設別による保幼小接続に関する考え方(4件法の平均と分散分析の結果)

	質問3 研修会必要性	質問4 カリキュラム必要性	質問5 小学校を意識した声掛け	質問6 教員同士の交流	質問7 子ども同士の交流
幼稚園	3.67	3.43	3.24	3.57	3.57
保育所(園)	3.51	3.30	3.09	3.38	3.45
こども園	3.48	3.27	3.08	3.54	3.46
全体	3.53	3.31	3.11	3.48	3.47
F値	1.059	0.697	0.284	1.249	0.359
有意確率	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

保幼小接続に関する研修・交流の実態及び保育者の意識

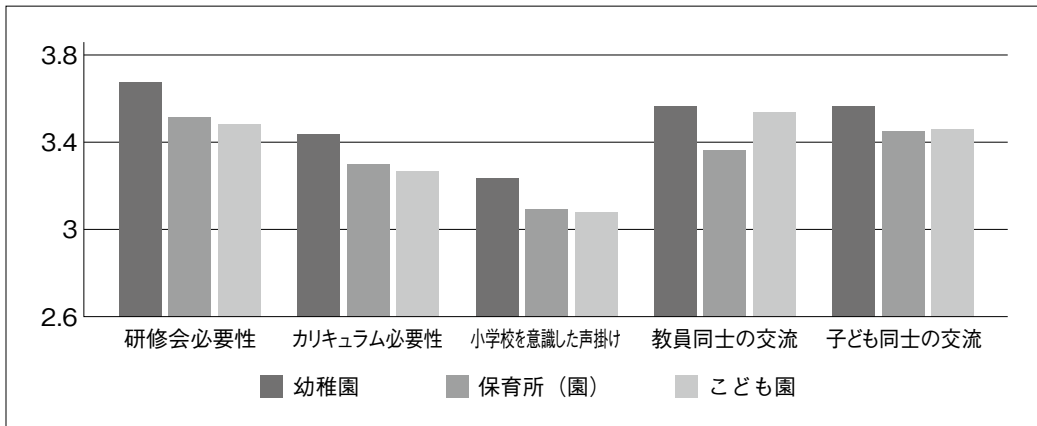


図1 勤務先別による保幼小接続に関する考え方

② 研修会及び交流の有無による保幼小接続の考え方

ここでは、調査参加者を幼小連携の研修会及び交流の有無で、4つのグループに分けた。内訳は、研修、交流ともにあり(28名)、研修のみあり(19名)、交流のみあり(46名)、研修、交流ともになし(23名)である。その後、前述と同様にグループ間で、保幼小接続に関する考えに統計的な有意差が見られるか一要因による分散分析を実施した。結果は表4及び図2の通りである。

まず、質問3の保幼小接続に関する研修会と、質問4の保幼小接続に関するカリキュラムは、研修・交流ありのグループがその必要性をより認めており、統計的にも有意であった。保育者が保幼小接続の研修会に参加し、その上で小学校との交流を行うことで、研修会の必要性やカリキュラムの必要性をより意識するようになるといえる。質問5の小学校を意識した声掛けは、

表4 研修会及び交流の有無による保幼小接続に関する考え方(4件法の平均と分散分析の結果)

	質問3 研修会必要性	質問4 カリキュラム必要性	質問5 小学校を意識した声掛け	質問6 教員同士の交流	質問7 子ども同士の交流
研修・交流あり	3.86	3.57	3.39	3.68	3.68
研修のみあり	3.42	3.42	2.95	3.26	3.26
交流のみあり	3.41	3.15	3.13	3.48	3.48
研修・交流なし	3.43	3.22	2.87	3.43	3.43
全体	3.53	3.31	3.11	3.48	3.47
F値	6.093	4.768	1.972	2.185	2.093
有意確率	p<.01	p<.01	n.s.	.05<p<.10	n.s.

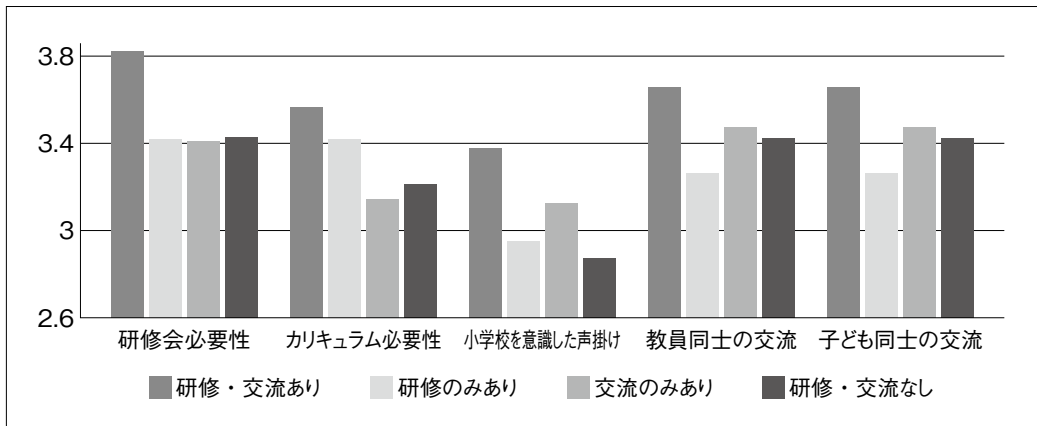


図2 研修会及び交流の有無による保幼小接続に関する考え方

4つのグループに統計的な有意差は見られなかった。しかし、研修・交流ありと交流のみありのグループは、研修のみと研修・交流ともになしのグループより、小学校入学後を意識した声掛けをしているという結果であった。これは、小学校との交流がもたらす効果ともいえよう。質問6の保幼小の教員同士の交流については、4つのグループ間の違いに有意な傾向がみられた。ここでも、研修・交流ともにありのグループが、他のグループより教員同士の交流の必要性を感じていた。実際に、研修会に参加し、小学校教員との交流をすることで、保幼小連携においてはまずは教員同士の交流が重要であると認識するのかもしれない。質問7の小学校1年生と年長児の交流の必要性については、グループ間で統計的な有意差はなく、いずれのグループの保育者もその必要性を感じているといえる。しかしここでも、研修・交流ともにありのグループが最もその必要性を感じていた。

③ 年代別による保幼小接続の考え方

続いて、保育者の年代別に、保幼小接続に関する研修会の参加状況に統計的に違いが見られ

表5 年代別による保幼小接続に関する研修会の参加有無(n=116人)

	参加有	参加無	合計
20代	7	13	20
30代	32	38	70
40代	7	12	19
50代	1	6	7
合計	47	69	116

$$\chi^2(3) = 3.142 \quad n.s.$$

るか、カイ二乗検定を実施した。結果は、表5の通りで、年代間で統計的な有意差が見られなかった。このことは、保幼小接続の研修会の参加状況は、年齢に関係ないといえよう。

次に、4つの年代間で、保幼小接続に関する考え方に違いが見られるかを一要因による分散分析を行った(表6参照)。ここでは、有意差が見られた質問3と質問5について分析する。まず、質問3の保幼小接続に関する研修会の必要性は、20代、40代の保育者が高く、30代、50代の保育者が低いという結果であった。この要因を今回の調査だけでは特定することは難しいが、研修の機会が多いことが保幼小接続の研修会も必要と感じたのかもしれない。例えば、20代の保育者であれば、初任者研修を始めとした研修の機会が多く、40代の保育者も、主任を対象とした研修会などがあって同様に研修の機会が多いといえよう。続いて質問5では、50代の保育者が小学校を意識した声掛けを他の年代より実践しているという結果であった。これは、保育経験年数が増えるとより小学校入学後を意識した声掛けをしているといえる。ただし、20

表6 年代別の保幼小接続に関する考え方(4件法の平均と分散分析の結果)

	質問3 研修会必要性	質問4 カリキュラム必要性	質問5 小学校を意識した声掛け	質問6 教員同士の交流	質問7 子ども同士の交流
20代	3.70	3.55	3.35	3.55	3.55
30代	3.44	3.26	2.93	3.43	3.49
40代	3.68	3.32	3.37	3.63	3.42
50代	3.43	3.14	3.57	3.43	3.29
全体	3.53	3.31	3.11	3.48	3.47
F値	2.232	1.968	3.080	0.760	0.414
有意確率	.05<p<.10	n.s.	p<.05	n.s.	n.s.

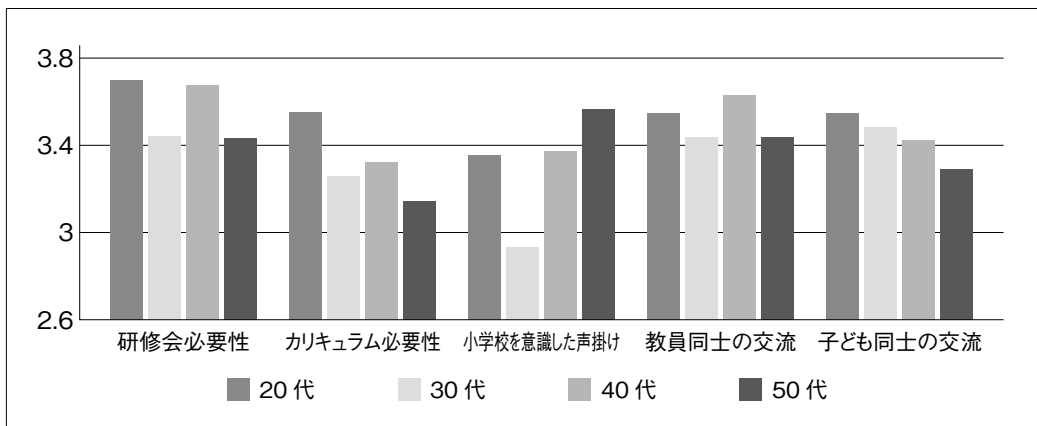


図3 年代別の保幼小接続に関する考え方

代の保育者が30代の保育者より小学校入学後を意識した声掛けをしており、これについては更なる調査が必要と言える。

2 記述式の質問紙調査

質問2では、保育者の施設での小学校との具体的な交流について、質問5では、小学校入学を意識した声掛けについて具体的に記入した。結果は、表7の通りである。まず、保幼小の交流で多いのは、「小学校への見学」、「小学校への招待」であり、幼児が小学校に行って小学生と交流する内容であった。また、次に多いのは、小学校に設置されている学童クラブ(児童クラブ)で幼児が小学生と一緒に遊ぶという回答であった。一方、小学生が幼稚園・保育所(園)に来園するという回答は少なかった。保幼小の交流は、お互いに行き来するというよりは、園児が小学校を訪問するケースが多いことが判明した。

次に、質問5では、小学校への期待感をもたせる声掛けをしている保育者が最も多かった。

表7 保幼小の交流と小学校入学を意識した声掛け

質問2(実施している保幼小の交流)	頻度	質問5(小学校入学後を意識した声掛け)	頻度
小学校への見学	34	小学校への期待感	27
小学校への招待	14	自分のことは自分でする・考える	11
小学生と一緒に遊ぶ	13	時間を意識する声掛け	10
児童クラブ・学童保育	8	小学校はどんなところか伝える	7
体験入学	5	話を聞く姿勢	6
町・村探険	3	生活習慣について	5
お弁当・給食を一緒に食べる	3	小学校への意識を高める声掛け	5
田植え	2	子供っぽい話し方をしない	5
絵本の読み聞かせ	2	返事や挨拶の仕方	4
ボランティアで来園	1	トイレの使い方	3
フィールドワークで園に来る	1	食事のマナー	3
デイケアセンター訪問	1	授業があるということ	3
職業体験で来園	1	自分の思いを言葉にして伝える	2
情報共有	1	困ったときは誰かに助けを求める	2
小学校教諭が来園し、話し合い	1	言葉でのコミュニケーションについて	2
散歩で小学校に行く	1	靴の脱ぎ履き	2
交流会	1	ルールや決まりごとについて	1
研究保育(小学校先生が来園)	1	身の回りのことを自分でする	1
お屋さんごっこ	1	周りをよく見る	1
		ひらがな(名前)の練習	1
		好き嫌いしない(給食に向けて)	1
		食事の準備や片付け	1
		小学校で何がしたい	1
		思いやりの気持ちを持つ	1

保育者は、幼児に小学校への期待感をもたせることで幼児の成長を促していると思われる。次に多いのは、「自分のことは自分でする」「時間を意識させる」で、小学校入学後に直面する課題について幼児に意識させている保育者が多い。

続いて、質問6では保幼小の先生同士の交流が必要な理由、質問7では年長児と小学校1年生に必要と思われる交流を自由記述で調査した(表8参照)。保幼小の先生方の交流が必要な理由としては、「情報交換」をあげる保育者が最も多かった。これは、担当している子どもを幼稚園などから小学校に円滑に引き継ぐという考えに基づいている。次に多いのが「年長児の姿の理解」で、小学校の先生方に年長児の様子を知ってもらった上で、低学年の児童の教育に当たって欲しいという保育者の願いといえよう。3番目に多いのが「入学前に対処できることがある」で、保育者はやがて小学校へ入学する年長児がスムーズに小学校の生活に馴染めるような準備をさせたいと考えている。

最後に、質問7では、年長児と小学校1年生の交流について記述式で調査した。ここでは、保幼小に関する研修会や交流の経験がない保育者でも、保幼小の交流が必要と考えている保育者に具体的な交流をあげてもらった。その結果、最も多い回答は、「一緒にあそぶ時間をつくる」であった。子どもは日常の遊びから学ぶことが多いことを保育者は経験上知っており、異年齢の子どもたちが同じ空間で遊ぶことをあげる保育者が多かった。

表8 交流が必要な理由と具体的な交流

質問6 (保幼小の先生の交流が必要な理由)	頻度	質問7 (年長児と小学1年生の交流)	頻度
情報交換するため(引継ぎ)	44	一緒に遊ぶ時間を作る	19
年長児の姿の理解	10	授業見学	18
入学前に対処できることがある	7	学校案内	6
幼稚園での取り組みを伝えられる	5	食事会(交流会)	5
スムーズに入学出来るように	4	行事への来園	4
書面では伝わりにくいものを話す	4	短時間でも交流会を設ける	3
学校に求められることへの理解	4	小学校での様子を聞く機会	3
スムーズに環境に慣れるため	3	小学校行事への招待	2
事前の準備物を知るため	3	1日体験入学	2
継続した見守りが出来る	3	レクリエーション活動	1
園の生活リズムを知ってもらう	2	校舎内探検	1
入学後幼稚扱いされないため	1	園外活動	1
入学後の様子も知りたいから	1	絵本の読み聞かせ	1
双方で違う内容であることへの理解	1		
先入観を持たれないように	1		
保育所と学校での様子の違い	1		
障害への理解を共通するため	1		
同じ目的で子供と関われるように	1		

IV おわりに

本研究では、保育者の保幼小接続に関する研修会の参加状況及びその意識について質問紙調査を実施した。その結果、以下の5点が明らかとなった。第1に、幼稚園、保育所(園)、こども園の施設の違いで保幼小接続に関する研修会の参加状況に差は見られない。第2に、保幼小接続に関する小学校との交流は、幼稚園が多く、保育所(園)は少ない。第3に、幼稚園、保育所(園)、こども園の施設の違いで保幼小接続に関する保育者の考え方に差は見られない。第4に、保幼小接続の研修会の参加と保幼小の交流経験がともにある保育者は、保幼小接続に関する研修会及びカリキュラムの必要性を強く考えている。第5に、保育者の年代別では、50代の保育者が小学校入学後を意識した幼児への声掛けを最も行っている。なお、第1、第2はカイ二乗検定、第3、第4、第5は、一要因による分散分析によって統計的に明らかとなったものである。

最後に、本研究の結果は次の2つの点で限定されたものであることを付言しておきたい。第1に調査対象が講習会に参加した保育者116名に限られていることである。第2に、調査対象の保育者の勤務している施設及び年代に偏りがみられたことである。今後は、調査対象を拡大し、その結果を基に効果的な保幼小接続のあり方を検討したい。

参考文献

- 1) 幼児教育研究センター「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」国立教育政策研究所、2017.
- 2) 全国幼児教育研究協会「学びと発達の連続性—幼小接続の課題と展望—」チャイルド本社、2006.
- 3) 小玉亮子「幼小接続期の家族・園・学校」東洋館出版社、2017.
- 4) 秋田喜代美「幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例」小学館、2002.
- 5) 無藤隆他「今すぐできる幼・保・小連携ハンドブック—小1ギャップの克服を地域で支える—」日本標準、2009.
- 6) 木下光二「育ちと学びをつなげる幼小連携—小学校教頭が幼稚園へとび込んだ2年間—」チャイルド本社、2010.
- 7) 酒井朗・横井絢子「保幼小連携の原理と実践」ミネルヴァ書房、2011.
- 8) 善野八千子・前田洋一「子どもの育ちと学びをつなぐ—幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成—」MJ-Books、2012.
- 9) 秋田喜代美・第一日野グループ「保幼小連携—育ちあうコミュニティづくりの挑戦—」ぎょうせい、2013.
- 10) 高櫻綾子「子どもが育つ遊びと学び—保幼小の連携・接続の指導計画から実践まで」朝倉書店、

2019.

- 11) 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園「幼児期の教育における学びを探る：石川県内の保幼小連携の実態と課題」金沢大学研究紀要, 61巻, 2015.
- 12) 白神敬介他「幼児期に求められる指導内容についての保育者と小学校教員の考えの相違」上越教育大学研究紀要, 37(1)巻, 49-55頁, 2017.
- 13) 古橋啓介他「子ども・子育て支援新制度導入後の基礎自治体の実態」福岡県立大学人間社会学部紀要27(1)巻, 1-20頁, 2018.
- 14) 鈴木まゆみ「保幼小連携の課題に関する一考察：私立幼稚園, 認定こども園へのアンケート調査の分析から」いわき短期大学研究紀要, 51巻, 143-161頁, 2018.
- 15) 郡山市総合教育支援センター「郡山市版スタートカリキュラム 一幼保と小の円滑な接続に向けたスタート・アプローチカリキュラム」郡山市教育委員会, 2014.

和文要旨

本研究では、保幼小接続に関する保育者の研修会の参加状況および保育者の考え方を明らかとすることを目的とした。そこで、幼稚園、保育所(園)、こども園に勤務している保育者を対象に、保幼小接続に関する質問紙調査を実施した。その結果、次のことが明らかとなった。

- (1) 幼稚園、保育所(園)、こども園の施設の違いで保幼小接続に関する研修会の参加状況に差は見られない。
- (2) 保幼小接続に関する小学校との交流は、幼稚園が多く、保育所(園)は少ない。
- (3) 幼稚園、保育所(園)、こども園の施設の違いで保幼小接続に関する保育者の考え方に差は見られない。
- (4) 保幼小接続の研修会への参加と保幼小接続の交流経験がともにある保育者は、保幼小接続に関する研修会及びカリキュラムの必要性を強く考えている。
- (5) 保育者の年代別では、50代の保育者が小学校入学後を意識した幼児への声掛けを最も行っている。

保幼小接続に関する研修・交流の実態及び保育者の意識

資 料

保幼小接続に関する質問紙調査

勤務先 ①幼稚園 ②保育所・保育園 ③こども園 ④その他 (○印をつけてください)

- 1 下記アンケートについて、該当する番号を一つ選んで○をつけて下さい。また、には具体例を記入して下さい。

質 問		ある	ない		
1	保幼小接続に関する研修会に参加したことはありますか。	2	1		
2	勤務先では、小学校との交流はありますか。	2	1		
	あると答えた場合、どのような交流ですか。				
		とても そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない
3	保幼小接続に関する研修会は、必要だと思いますか。	4	3	2	1
4	勤務先に保幼小接続のカリキュラムは必要だと思いますか。	4	3	2	1
5	小学校入学後を意識した声かけを幼児にしていますか。	4	3	2	1
	「とてもそう思う」「そう思う」と答えた場合、どのような声かけをしていますか。				
6	小学校の先生と保・幼の先生との交流は必要だと思いますか。	4	3	2	1
	「とてもそう思う」「そう思う」と答えた場合、その理由を書いてください。				
7	小学1年生と年長児の交流は必要だと思いますか。	4	3	2	1
	「とてもそう思う」「そう思う」答えた場合、具体的な交流を書いて下さい。				

- 2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の一つである、「自然との関わり・生命尊重」について、勤務先で取り組んでいること、又はこれから取り組みたいことなどを記入して下さい。

アンケートの内容は、研究目的以外で使用することはありません。また、個人が特定されることもございません。

研究等で使用するについて、 同意します 同意しません (チェックをお願いします)

ご協力ありがとうございました。